
王と妃 千妃

楽雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と妃 千妃

【NZマーク】

N1938D

【作者名】

楽雨

【あらすじ】

王とその王妃の物語。一人はとても仲睦まじかった。

ギシギシと、床が軋む。古い大きな寺。

襖を開けると千妃はいつものように平伏していた。

「王…」

千妃は顔をあげた。王宮から逃げ一月。もともと細い彼女の体は、さらに肉があちた。

「千妃、大丈夫だ、追手は寺に気付かなかつたようだ。もつ少し北へ行こう。大丈夫だ。もつと寒くなるが、安心して暮らせるだらう…大丈夫だ」

大丈夫。

一月前から、王はそう繰り返す。彼女を安心させるため。

千妃はいつものように王に笑顔を向けた。美しく花のようだ。王は彼女を抱きしめた。

「大切な千妃。必ず…共に逃げようぞ」

「いえ、もう…いいのです」

「はい、かならず」

そう言つていた返事が変わつた。王は驚き、千妃の瞳をのぞく。

「妾を、殺めくださいまし」

「千妃」

「花種が、教えてくれました…妾のせいであると」

おとなしい侍女だつた。千妃の髪をいつも結つてくれていた。この、あてのない旅にも付いて来てくれた。

「お前のせいだ」

張り詰め、押し込めていた思いを全て吐き出すように、花種は千妃に櫛や簪を投げつけた。

「お前が名君を地に落とし、故国をボロボロにしたー何故だーお前さえいなければこの国は更なる発展が望めたー」

聞いていて苦しかつた。わかつてた。でも理解したくなかった。

口に出そうものなら、自分が崩れて消えてしまいそうだつたのだ。

「お前はいってはならない」

「ワラワハイテハナラナイ、

「王、殺めてくださいまし、妾は王の手で、死にとつぱれこますゆえ」

「千妃、お皿のせいではない、朕がふがいなかつたのだ」

「妾をえいなれば…このようなことにはなりませんでした。王は名君であり続けられた…そうぞございましょう。妾を殺め首を曝してくださこまし。玉座にお戻りくださいまし」

「そなたをえいれば、朕は…朕は玉座などいらぬ」

「王、民草には貴方が必要なのです。王は天恵、神の子孫。軽々しくいらぬなど申すものではござこません」

びしゃりと言い放つ小娘。王は一十も年下の千妃の言葉に呑まれた。

「朕は…朕は」

「弱気にならないで下さこ」

千妃は懐から護身等をとりだす。千妃が妃になつた際、彼女の父が贈つた物だつた。

「お願いします、妾はこれ以上、この世にいたくはござこません。最後の願いです王の手にて」

「千妃…」

「王の手にて、極楽浄土へ…いえ、地獄に送つてくださいまし」

そうすれば、貴方の心にずっとこれる。たとえ炎に焼かれよつと、妾の心は、貴方の心と共にあむ。

ほら、寂しくない。

王は涙をこぼした。彼女がいて、知ることができた。ぬくもり、安らぎ、愛される喜び、愛する喜び。

「早く」

千妃も涙を落とす。

「故国が再び収まれば、また会うこともありますゆえ」

血の匂いが広がる。

「許されるなら

貴女と共にいたかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1938d/>

王と妃 千妃

2010年10月9日04時48分発行